

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第47号

目次

場所の記憶が未来の光源になる

—大阪コリアタウン歴史資料館を開く—
伊地知 紀子 2大学沿革史編纂は今どうなっているのか
西山 伸 4

日誌 6

大学文書館の動き： 7
「谷内正順関係資料」をご寄贈いただきました戦時下における京大の看護婦
扈 素妍 8

看護婦産婆養成所看護婦科の第八十二回卒業生

1945年4月に卒業した看護婦産婆養成所看護婦科の第八十二回卒業生の写真。一列目の左から5番目と右から5番目の二人は看護服の下にモンペ姿、真ん中の二人は国民服姿であることから戦争の影がうかがえる。看護婦産婆養成所の規定によると、看護婦科の生徒は生徒である同時に「看護婦見習」として日給及び食料を貰っていた（関連記事8頁）。

場所の記憶が未来の光源になる —大阪コリアタウン歴史資料館を開く—

大阪公立大学教員・大阪コリアタウン歴史資料館副館長 伊地知 紀子

大阪市生野区の北東角に位置する JR 鶴橋駅から西に 15 分ほど歩くと、大阪コリアタウンと呼ばれる商店街があります。全長 500 メートルほどのこの通りを目指す人波は、駅から途絶えることはありません。新しい店舗にすぐさま行列ができる様子は、平日も休日も関係なしです。訪れる人びとの多くは、韓流グッズや韓国グルメ、コスメティックが目当てで、今や年間 200 万人を超える勢いです。けれども、ここになぜコリアタウンがあるのか、その歴史を知る人はごくわずかといってよいでしょう。

大阪コリアタウンは、かつて朝鮮市場と呼ばれていました。1930 年前後に、現在のメインストリートから一本裏に入った路地が、朝鮮市場発祥の地です。当時の様子を、済州島から来た高権三は次のように記しています。

「私は十年前から大阪に来て住んでいた或る友人の案内で、この市場を見に行ったが、身動きも出来ない程に人が混雑していた。

店先には朝鮮産の品物が色々と陳列されている。殊に朝鮮の人の常に履くところのゴム靴、朝鮮の人の食料品中、一番に好くところの明太の山は、なつかしい朝鮮を思わせるに十分であった」(高権三『大阪と半島人』東光商会書籍部、1938)。

1933 年発行の『アサヒグラフ』にも朝鮮市場の姿が活写されています(写真 1)。ここは、かつて猪飼野という地名でした。大阪の猪飼野という地名にゆかりのある猪甘津は港であることを示し、朝鮮半島に古代に成立した三韓(百済・新羅・高句麗)のうち、唐・新羅連合軍に攻め滅ぼされた百済から人びとが渡来し居を構えた地域です。時代を経て、1920 年代の大阪は、「東洋のマンチェスター」と呼ばれる



写真 1:「大阪の新名所」となった猪飼野の朝鮮市場
(出典:『アサヒグラフ』朝日新聞社、1933)

ほどの一大工業都市へと様変わりし、日本の植民地下で困難な生活を強いられた人びとが、朝鮮半島そして済州島から生活の道を求めて渡ってきたのでした。とりわけ済州島の人びとが多く暮らし、「日本国猪飼野」を住所地に書くだけで郵便が届いたといわれます。

日本の敗戦／朝鮮の解放後、冷戦体制下での済州 4・3、朝鮮戦争、南北分断と、生活を再建するにはあまりにも過酷な混乱期中、「国境をまたぐ生活圈」の中で来阪は続きました。継続する植民地主義は、在日コリアンへの差別と排除の壁となって立ち上がり、人びとの日常にも朝鮮半島の分断は持ち込まれました。表通りに移った朝鮮市場には、1960 年代末、永住資格の取得をめぐる民族団体のスローガン対立が横断幕として掲げられたのでした。1990 年代を迎える頃、低迷期を迎えた朝鮮市場は、活性化策として現在の大阪コリアタウンに至る行程を歩むことになります。2000 年代に入ってから韓流のインパクトは絶大で、猪飼野で暮らしてきた人や朝鮮市場を知る人たちにとって、現在の姿は思いもよらないものとなっています。

こうした変化のなか、在日コリアンが最も多く集住してきた大阪に、その軌跡を学ぶ場を開きたいと思いました。大阪では、かつて学林図書室(1979-1989)と青丘文化ホール(1984-2001)がありましたが、残念ながら閉館となりました。大阪に新たに開設しようと、賛同してくれる在日コリアンの知人友人に呼びかけ、2021 年 4 月からアイデアを練り始めました。この年は、ちょうど大阪コリアタウンで様々な取り組みが動き始めていました。近隣の大阪市立御幸森小学校が 2021 年 3 月に閉校となり、跡地活用事業として NPO 法人「IKUNO・多文化ふらっと」が株式会社 RETOWN と共に「いくのコーライブズパーク」として 2022 年から始動することになっていました。また、2021 年 12 月には、御幸森商店街を構成していた 3 商店街が統合され「一般社団法人 大阪コリアタウン」として新たなスタートを切りました。地域に関連するミュージアムは必要だが具体的な動き

にはつながっていない、そういう頃合いでした。

東京の在日韓人歴史資料館（2005 年開設）は、在日コリアン史全般について展示をしており、滋賀の渡来人歴史館（2006 年開設）も同様です。京都のウトロ平和祈念館（2022 年開設）は、地域性を活かした展示となっています。そこで、冒頭で述べたように、この地にコリアタウンがある、その歴史を知る人は圧倒的に少ないという現実を踏まえ、「大阪コリアタウン歴史資料館」という名称に決めました。次に、どの政府からの公金も受けず民間からの支援のみで開館することを目指し、2022 年 7 月から 3,000 万円を目標に寄付の募集を開始し、9 ヶ月で目標額に達する支援をいただきました。

展示作成には、研究者、郷土史家、地域活動や教育に長年携わってきた人、さまざまな経歴の在日コリアンと日本人が参集し、それぞれ所有の資料群や経験知を持ち寄り、2023 年 4 月 29 日開館に漕ぎつけました。構成は、タイムマシーン式に現在から過去になっています。日本の植民地支配について、最初から関心のある人はすでに学ぶ姿勢ができていますが、具体的な内容をほぼ知らない日本人（特に若い世代）が、いきなり加害の歴史を突きつけられても「過去のことだ」と通り過ぎるかもしれません。「こんなこともあったのか」と何の印象も持たず再度観覧に来ない可能性も高いのです。韓流を求めて大阪コリアタウンを訪れる人びとに、少しでも関心を持ってもらうために、現在の大阪コリアタウンの姿を入りに置き、観覧していくにつれ過去を知る構成にしました。奥には、在日外国人研究の泰斗である田中宏さんの蔵書を「田中宏文庫」として配架しました。

大阪コリアタウン歴史資料館の構想への契機の一つに、ミックス・ルーツの若者たちの存在があります。コリアン・ルーツを持つ人は、近年ますます多様化しています。母方祖母が日本と朝鮮半島のミックスルーツであり、国籍は韓国であったが日本名を名乗ってきたので、もはやコリアン・ネームは不明という人にもお会いしました。こうした出会いを重ねるなかで、ミックス・ルーツゆえに「私は 100% じゃない」、あるいは「本当の在日じゃない」と卑下することなく、「カジュアルに集まって自分の学びを持てる。無理のない範囲で自分の学びを積んでいく。そういう場所って必要だろう」と思っていました。

何とか無事開館できた後も、全てが手探り試行錯誤の日々ですが、開館から 10 ヶ月で

来場者 1 万人を越えました。予想外の数ですが、こうした資料館が必要とされていたことを示す数字であると思います。小中高の人権フィールドワークや社会見学の一環として、あるいは大学のゼミや会社の研修のため団体で来館するケースも増えています（写真 2、3）。大学生や大学院生は、卒業論文や修士論文についての相談や調査のためにしばしば訪れます。また、去年はコリアン・ルーツを持つ若者が訪れ、うち二名によるルーツ探しの旅に同行し、一名は祖父の生家がかった住所まで辿り着き、もう一名は親戚姻戚に会うことができました。



写真 2：大阪コリアタウン歴史資料館



写真 3：草津市の中学生たちの見学風景

大阪市生野区は、住民の 7 割強が「韓国・朝鮮」籍として住民登録されています。国籍を問わずコリアン・ルーツをもつ人びとを数えると、さらに多いでしょう。この地域がなぜこのような住民構成なのか、同じ住民であっても法制度上同様に扱われたのか、地域の暮らしの中での相違は何なのか、といった多様な視点から、大阪コリアタウン歴史資料館は、大阪・猪飼野の地域史を伝える場として開かれています。私たちは、来館する人びと誰しもが、展示の内容のどこかに自身との繋がりを見出すような、気づきを生む場となることを目指しています。こうした展示への工夫を模索し続けることによって、新たな住民像、地域観、世界観を育てる実践の場となっていくのではないのでしょうか。

* 大阪コリアタウン歴史資料館 HP：<https://oktmuseum.or.jp>

大学沿革史編纂は今どうなっているのか

京都大学大学文書館教授

西山 伸

ここ数年、本格的な大学沿革史の編纂が続いている。また昨年には、小林和幸著『東京10大学の150年史』（筑摩書房）なる本も刊行された。さらにいくつかの大学で沿革史編纂が計画されていることを筆者は個人的に聞いている。実は今、大学沿革史編纂が小さなブームに入っているのではあるまいか。そこで本稿では、最近刊行された大学沿革史を取り上げ、筆者が恣意的に考案した数個の指標にもとづいて、大学沿革史編纂の現状をさぐってみたい。

ここで取り上げるのは、一昨年・昨年に刊行された以下の6点の大学沿革史である。

- ①名古屋大学編『名古屋大学の歴史
1871～2019』（全2巻）2022年
- ②早稲田大学百五十年史編纂委員会編
『早稲田大学百五十年史 第1巻』2022年
- ③京都大学百二十五年史編集委員会編
『京都大学百二十五年史 通史編・資料編』
2022年
- ④立教学院百五十年史編纂委員会編
『立教学院百五十年史 第1巻』2023年
- ⑤大東文化大学百年史編纂委員会編
『大東文化大学百年史 上』2023年
- ⑥東京外国語大学文書館編
『東京外国語大学150年のあゆみ』2023年
なおこのうち②④⑤については続刊が予定されているので、ここでは現在刊行されている分のみを取り上げている。

筆者が考えた指標は、次の5点である。繰り返すが、大学沿革史の選択、以下の指標およびそれにもとづく評価は筆者の全くの独断である。

（1）形状

重厚長大型：②④⑤

コンパクト型：①③⑥

大学沿革史といえば、大部なものが主流である。上製本であることはもちろん、布クロスで巻かれ、函に入っているイメージである。対象となる年数の長さ、引用する資料の量などを考えると大部になるのは当然だが、そうすると読み通すのは容易ではなくなる。大学沿革史における形状とは、いわば資料として辞書的に使われることを想定する（重厚長大型）か、読み通してもらうことを優先させるか（コンパクト型）という問題であるといえる。また「百年」「百五十年」といった周年の中でもより顕著な区切りに編纂される場合は、重厚長大型が選択されやすいものと思われる。なお筆者の知る限り、コンパクト型のうち①③は市販されている。

（2）媒体

紙：①②④⑤⑥

紙・電子併用：③

これからの大学沿革史編纂には、電子媒体を利用するか否かが避けて通れない問題になる。2017年に完結した『九州大学百年史』は、写真集を除く11巻すべてがウェブ上でのみ公開され、紙媒体はつくられなかった。紙と比べて電子媒体にはメリットがある。紙幅という制約が事実上なくなること、電子機器さえあればどこでもアクセスできること、検索や更新が可能なこと、制作費が安く済むこと、などが挙げられよう。だが今回取り上げた沿革史の大部分は電子媒体を使用していない。なぜ使用しなかったのか、議論があったのか

なかったのかは、外からでは分からない。一方③においてなぜ紙と電子を併用した（通史編が紙、資料編が電子）かについては、筆者は別稿（『『京都大学百二十五年史 通史編』が目指したもの』（『京都大学大学文書館研究紀要』第21号、2023年））で触れたのでここでは繰り返さない。

（3）執筆体制

集団執筆型：①②④

個人執筆型：③⑤⑥

遡れば『東京帝国大学五十年史』（1932年）のように、以前の大学沿革史は一人のカリスマ的な執筆者によって書かれることが珍しくなかった。しかし1980年代以降、編纂がシステム化されていくなかでそうした沿革史は見られなくなり、数人、時には数十人による分担執筆が当たり前になっていった。対象年数の増加、大学機構の複雑化、執筆する教員の多忙化など、さまざまな理由が考えられる。それが今回、半数の沿革史で個人による執筆が復活しているのは興味深い。

（4）アーカイブズとの関係

業務として全面的に関係：①②④⑤⑥

無関係（資料の提供のみ）：③

今存在している日本の大学アーカイブズの多くは、沿革史編纂を契機に設置されたものである。現在ではその関係はいわば逆になり、すでにアーカイブズを有する大学が沿革史を編纂する場合が少なくない。そのとき、アーカイブズが編纂に関わるか否かは重要な問題である。筆者自身の考えは別稿（『沿革史編纂とアーカイブズー古くて新しい問題ー』（『大阪大学アーカイブズニューズレター』第22号、2023年））で述べたとおりで、③の編纂においては、その考えに沿って大学文書館は資料提供以外の関係を持たなかった。しかしそれは少数派で、現実にはほとんどの沿革史でその大学のアーカイブズが全面的に執

筆・編纂にコミットしている。

（5）内容の重点（完結した沿革史のみ）

現状重視型：①

歴史重視型：⑥

バランス型：③

①は1871年から2019年までを叙述の対象にしているが、その第1巻で1989年までの約120年を扱っているのに対して、第2巻では1990年以降の約30年のできごとを叙述している。名古屋大学では過去に『名古屋大学五十年史』が編纂されているという事情はあるにせよ、①では1990年代のいわゆる大学改革以降に重点が置かれていることは明らかである。逆に⑥は、1873年から1945年までで208頁を費やしているのに対して、1946年から2023年までが159頁と、どちらかと言えば戦前にウエイトをかけている。この両者の間をとっているのが③であった。

なお今回取り上げた6点の大学沿革史は、いずれも各部局の歴史については叙述されていなかった。

以上ごく簡単に比較してみた。最後に述べておきたいのは、大学沿革史編纂には正解はないと筆者が考えていることである。従って、本稿は編纂とはこうある「べき」と主張しているものではないことは、言うまでもない。

ただ大学沿革史とは、刊行された内容のみならず、その作られる過程にも大学のありようの一端が現れるものなのではないか、と最近思うのである。

[日誌] (2024年4月～2024年9月)

2024 年		7/11	西山、谷内正順関係資料調査のため慶専寺(石川県津幡町)に出張。
4/ 2	学外より、藤縄謙三関係資料の公開方法につき照会。	7/22	学外より、『黎明』河上祭記念特集号・『ちんれつかん』の所蔵につき照会。
4/ 6	西山教授、新採用職員研修において「京都大学の歴史」「なぜ公文書を作る ―公文書管理法と私たち―」と題して講義。	7/23	学外より、1949・1950年の学生自治会・学生運動に関する写真につき照会。
4/ 8	清水勇氏より、第三次「京大俳句会」会報・自由船終刊号他5点寄贈。	7/25	大学文書館運営協議会。
4/ 9	学外より、松本均の日記にドイツ留学時代のMa Hoの記載があるかについて照会。	7/30	大学文書館教員会議。
4/18	NHK 大阪放送局より、「なぜ、関西の大学は学年のことを「回生」というのか」につき取材(4月24日(水)「ほっと関西」で放映)。	7/31	オフィスアシスタント張賢雅退任。
4/18	大学文書館教員会議。	8/ 6	第39回企画展「京都帝国大学」から「京都大学」へ―戦後改革が残したもの―開催(～10月6日)。
4/23	橋本助教、日本アーカイブズ学会2024年度大会自由論題研究発表会(於学習院大学)において、「AIによる公文書への影響: I Trust AIの枠組みと日本チームの活動」と題して研究報告。	8/ 7	京都新聞より、企画展につき取材。
4/26	松尾茂雄氏より、桑田武夫の講演テキスト『現実的思考について』寄贈。	8/16	オフィスアシスタント関恵正採用。
4/30	『京都大学大学文書館だより』第46号刊行。	8/16	谷内正立氏より、谷内正順関係資料寄贈。
5/ 8	学外より、時岡鶴夫関係資料につき照会。	8/23	新規職員の「メンター制度」による学内他部署見学の一環で、大学文書館業務・施設視察のため事務職員来館。
5/ 9	メディア・バスターズより、1946年に京大工学部に入学生のある学生の在学中の経歴等につき照会。	8/23	学外より、田中秀央関係資料中に黒田チカよりの書簡の有無につき照会。
5/21	学外より、三高の物理実験機器の教育的使用に関する照会。	9/ 5	国立民族学博物館より大学文書館の業務・施設視察のため来館。
5/23	学内より、教養部時代の成績表の大学文書館へ移管可否につき照会。	9/ 6	京都新聞より、学徒出陣につき取材。
5/30	大学文書館教員会議。	9/ 5	内田亮介氏(京都大学鉄道研究会会長 西部課外活動施設使用団体連絡協議会代理)より、院生協議会関係資料寄贈。
6/ 4	読売新聞より、学徒出陣につき取材。	9/ 8	西山、京都大学教育学部75周年記念「〈京大・教育〉のコシカタユクスエ ―名誉教授と考える」(於京都大学百周年時計台記念館)において、「教育学部設置をめぐるあれこれ ―京大沿革史編纂の現場から―」と題して講演。
6/11	橋本、カナダアーキビスト協会2024年度大会(オンライン)において、「The First Stage of Black Boxing: Japanese Context of Recordkeeping」と題して研究報告。	9/14	西山、京都葵の会第216回例会(於からすま京都ホテル)において、「二番目の大学として ―「京大」の創立」と題して講演。
6/12	学外より、昭和初期に台湾から京大医学部に留学した祖父について照会。	9/18	学内より、医学研究科・医学部125周年記念誌英語版に写真を掲載するにあたってコピーライトの書き方について照会。
6/19	学外より、1921年経済学部入学者の卒業について照会。	9/19	株式会社TBSスパークルより、1933年前後の大学教授の給与等について照会。
6/27	大学文書館教員会議。	9/19	大学文書館教員会議。
7/ 2	学外より、学徒出陣につき照会。	9/27	堀内三郎・石田基蔵関係資料を公開。
7/ 4	金光教教学研究所より大学文書館の業務・施設視察のため来館。	9/30	看護部関係資料を公開。
7/ 6	西山、第91回羽田記念館定例講演会(於京都大学羽田記念館)において「『羽田亨日記』に見る戦時期の羽田亨と京都帝国大学」と題して講演。		

大学文書館の動き

「谷内正順関係資料」をご寄贈いただきました

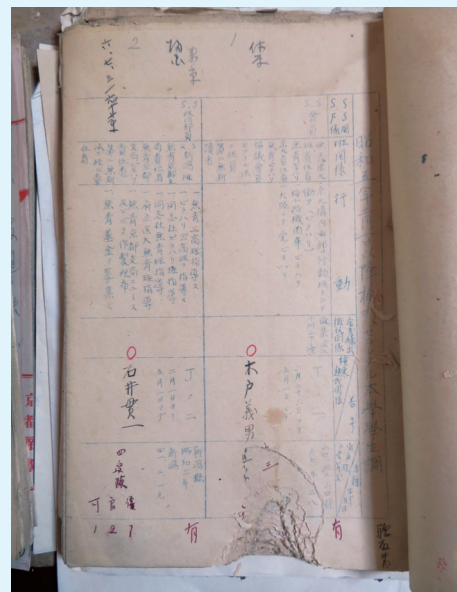
大学文書館は、去る 8 月 16 日に「谷内正順関係資料」をご寄贈いただきました。

谷内正順（1886～1968）は石川県羽咋郡河合谷村（現津幡町）出身、第一高等学校から東京帝国大学文科大学に入学、倫理学を専攻し、1911 年の卒業時には「恩賜の銀時計」を授与されています。卒業後は、松本高等学校教授、大谷中学校長、高岡高等商業学校教授などを経て 1927 年 6 月に京都帝国大学学生監事務嘱託になり、以後 1932 年 10 月に京大を去るまで学生監、学生課長などを歴任しました。京大を退任後は実家の慶専寺の住職を勤めるかたわら、真宗大谷派教学研究所長などにも就任しています。

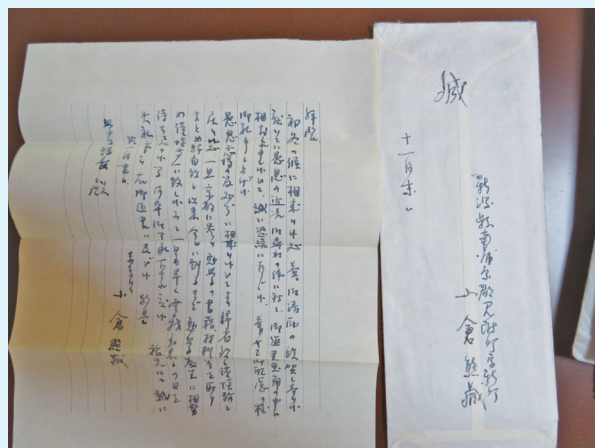
今回谷内正順関係資料のご寄贈に関して、令孫の正立様よりお話をいただき、本年 7 月に当館の西山教授が慶専寺に調査に伺って正順の京大勤務時代の資料を選別しました。

ご寄贈いただいた資料は計 291 点で、その多くが当時の京大における学生運動に関係したものです。谷内正順が京大に勤務していた 1920 年代後半から 1930 年代前半には、全国の高等教育機関で学生の左翼運動が尖鋭化しており、京大でも検挙されたり大学によって処分されたりする学生が相次いでいました。そうした情勢を反映して、資料中には文部省や他大学と学生に関して情報を交換している書簡や、処分を受けた学生の親からその学生の近況を伝える書簡などがあります。また、左翼運動関係のビラや、文部省で開催された学生・生徒主事の会議についての書類なども目を引きます。

これらの資料によって、当時の京大における学生左翼運動の実態が分かるようになるとともに、学生担当の職員がどのような業務を行っていたのか、その姿を垣間見ることができるのではないのでしょうか。



検束された学生に関する資料



処分を受けた学生の親からの書簡

人の動き（2024 年 4 月～2024 年 9 月）

2024 年 4 月 1 日

扨素妍^{ホソノ}、大学文書館助教に着任。

戦時下における京大の看護婦

京都大学大学文書館助教

扈 素妍

創立期から京大は、多様な職員により日常を支えられてきた。その中でも看護婦（現在は看護師）は、1899年、京都帝国大学に医科大学附属医院が創立された年から雇われていた職員として、京大の歴史とともに歩んできた。さらに、その数も多く、1936年には看護長13名、看護婦253名、看護手13名、看護婦見習生248名で、看護職の職員が計527名であり、大学全体の職員3885名（ここには「俸給」ではなく「月給」を貰う現在の非正規職員にあたる「嘱託」「雇員」「傭人」まで含む）のなか、約14%程度を占めていた（『職員及傭人数調京都帝国大学沿革調』識別番号：11A00771）。そのため、京大における看護職員の歴史を明らかにすることは、京大の全体的な歴史の解明につながると考えられる。

今回は、本年9月に公開した『看護部関係資料』から見える看護職員の戦時下の様子を紹介して、これからの研究の糸口にしたいと思う。当時看護婦・同見習生などの看護職員は、規則によればほぼ全員寄宿舎に入っていた（『京都帝国大学附属医院例規集』識別番号：P06970）。この寄宿舎は、1935年には校内の三ヶ所に設けられていて、その中、最も大きい規模のものが今の「風の子保育園」辺りに位置していた（図1、『京都帝国大学概覧』識別番号：P08940）。

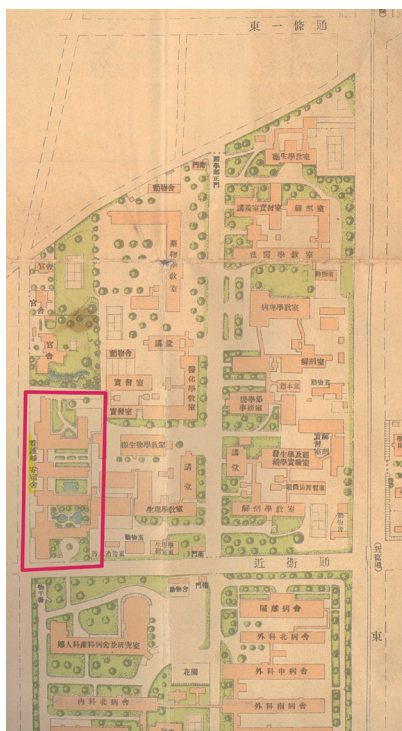


図1 1935年度の看護婦寄宿舎の位置

戦時期になると様々な方面から戦争の影響を確認できる。例えば、1943年6月23日付の起案は、当時医院の看護員が「婦人戦時服」としてモンペはすでに所持していたが、「防火頭巾」は持っていないものが多いため、その材料としては「古布」を使って、7月15日頃までには全部作製することを求める内容である（『看護員防空服装整備二関スル件』『看護婦関係決済書類綴』識別番号：看護部-2）。

また、例年催していた看護職員対象の遠足も変化から逃れられなかった。この遠足は1942年から「錬成」と名付けられ、その目的には「皇軍将兵ノ武運長久ノ祈願ヲ為ス」という一文が追加される。この「看護員秋季錬成」では、1942年には「摂津桜井駅」（現在桜井駅跡）・水無瀬宮・天王山方面、翌年には滋賀県近江神宮、1944年には高雄方面を訪れていた（『看護婦同見習秋季錬成実施ノ件』『看護婦同見習ノ秋季錬成実施ノ件』『看護員秋季錬成実施ノ件』同前）。各年度の参加者は、42年二日間で計462名、43年二日間で計約500名、44年三日間で計356名が参加したかなりの規模であった。

さらに、看護婦・同見習生の修養のために開催していた、「看護員講演会」の内容にも戦争の影響がうかがえる。1942年には12月8、9日が「米英撃滅ノ大詔ヲ拝シテヨリ正二一周年」になる日であるため、「益々戦時生活ヲ確立」しなければならず、「看護院（ママ）諸氏ノ精神修養ノ為」に、8・9日に講演並びに映画会を行うことが決定された。講演は「正法精神ノ昂揚」という題で、本派本願寺執行の岡部宗城を講師で招いた。その後、「軍国ノ花嫁」などの映画を観覧した。終戦直前の1945年2月には「戦場ヨリ見タル母性ノ力」という題で大政翼賛会京都支部事務局長の村田凱一を講師で招いて講演会を開催した（『看護婦同見習修養講演会開催ノ件』『看護員講演会開催ノ件』同前）。

以上、簡略に京大看護職員の戦時下の様子について触れてみた。今回公開した『看護部関係資料』には、明治期や大正期の資料は数少ないが、戦時中や戦後の資料が含まれていて、この資料を土台にして、京大の看護職員の職務や養成に関する新しい知見を導き出すことが期待される。